

地域住民である。言われてやるのと自らすすんでやるのでは、発揮されるパワーがまったく異なる。ともすると行政依存というか行政にお任せの農村振興がきわめて多いように感じる。祭りは後継者不足で取りやめするところが増加しているが、一方で、若者や女性を登用して継続・復活させているところも少なくないようだ。祭りを象徴に、伝統を大事にしつつ、知恵を絞りアップデートしながら主体性を引き出していくことが重要だ。

〈参考〉イタリア農村での経験と事例

コロナ発生前は十数年、毎年のようにイタリアに足を運んできたが、日本と同様に山間部が多く、EUの中では農業の経営規模は小さいものの、地域性を活かした農業を展開しているなど、農村振興で教えられところは多い。スペースの関係から、前記aからdに関係する四つだけ紹介しておきたい。

第一が、イタリアは有機農業が最も盛んな国として知られるが、これは一面であり、もう一面では農業の近代化、大規模化もすさまじい。例えばイタリア北部、アルプス地域からミラノに向かって鉄道で

ゲート街道を走ると、途中、矮化栽培が行われているリング畑が10分も20分も延々と続く。またイタリアの南部、カンパーニア州のサレルノからチエラーゾに向かう途中の海岸線の平地には、20^キ以上もビニールハウスが続き、輸出向けの野菜の工場生産が行われている。ここを抜けて中山間地に入ると様相は一変、小規模ながら有機農業が展開されている。これは一例にすぎないが、イタリアの中山間地域では有機農業に取り組んでいる者が多く、有機農業により平地農業と差別化し、これがアグリツーリズモ、農家民宿等と一体化している。すなわち中山間地域と平地農業の差別化が進行しており、結果的にそれぞれの特性を活かした農業に棲み分けしつつある。

第二はこれにも関連するが、有機農業の概念が変化しつつあることである。同じカンパーニア州のチレント地区の取り組みであるが、ここでは農業・化学肥料を使わないのが有機農業というレベルを超えて、「化学的なものを使わないとする文化が大事であり、そのシンボルとして有機農業」を位置付け、文化・歴史や環境、景観と一体化するとともに、山側と海側とが連携しての地域振興を図っている。海側

にあるギリシャ古代遺跡の見学客や海水浴客と山側の有機農業を連携させての有機レストランや学校給食での有機食材の利用、自転車道の整備による海水浴客等の山側への誘導を図ってきた。意識的な有機農業への取り組み推進で地域循環を膨らませながら、小規模・家族農業が生き残っていく道を広げようとしている。

第三であるが、これは多分2005年のことだったと思うが、忘れられない貴重な体験だ。ローマにある農業・食糧・林業政策省（当時）に足を運び、イタリアの地域農業、有機農業への取組状況や政策についてのヒアリングに出かけた時の話である。女性の課長補佐に中堅男子職員の5、6人が対応してくれたのであるが、当方の質問に「分からない」「いくつかの州に足を運んで、その州政府に聞いてほしい」との反応。狐につままれた思いで、それはなぜなのかやりとりするうちに分かったのが、農業・食糧・林業政策省（当時）はEUからの予算の配分と業務の調整、統計業務を行うだけで、予算も全体の2割しかコントロールしていないと言う。要するにイタリアの農業予算のほとんどはEUから州政府に流れ、

農業政策の企画も州政府が行っており、農業政策の具体的な展開については現地に行ってみないと分からないという。さほどに地方分権が徹底しているということでもある。イタリアの本質を垣間見る思いがするとともに、驚いたという以上に、実にうらやましくも感じたのである。

第四に、イタリアの農村を訪ねると、ほとんどどこでも誰でも、自分の住んでいるところが世界で一番いいという。初めはイタリア人が話をする時の常套的な表現かとも思ったのであるが、どうもそうではなく本当にそう思っているらしい。「マンマの味が一番」というのも同じようだ。あるコムーネ（基礎自治体。日本のような市・町・村という人口による名称の区別はない）の市長に午後一番にお会いする予定となっており、その前に町を散歩していたところ、たまたますれ違った60〜70歳ぐらいの男性が、自分が案内してやるということと30分ほど一緒に歩き、それからカフェでお茶をごちそうになった。その間、「どうだ、いい町だろう」「ここが世界で一番いいところだ」という話を耳が痛くなるほど聞かされた。

また、コモーネの三役は選挙で選ばれるとともに、給与はわずかで実質ボランティアが多いという。イタリア北部のピエモンテ州のヴァレーゼ・リーグレンなるコモーネに滞在した折、泊まったホテルで朝食をとったが、その女主人の適切かつ親切な対応が印象的であった。朝食を済ませて少し時間を置いてから、市長にヒアリングするためにコモーネの庁舎を訪問したが、応接室で待っていたところ出てきた市長は、何と宿泊しているホテルの女主人であった。

日本人とイタリア人とは違う、と言ってしまうがそれまでであるが、イタリア人の郷土愛は見上げたもので、こちらのコモーネを見る目も変わった。また、殆どの市の三役は実質ボランティアが多いというのは、市民の主体性に大きな影響を与えているように感じた。

(2) 関係人口づくりのポンプは

都市農業振興・都市農地保全

今回の農業白書で、都市農業については、第6章「農村の振興」の最終第8節で「都市と農村の交流による農村関係人口の創出と移住の促進」が置かれている。そして第8節は次の四つの項、すなわち(1)

「農村関係人口の創出・拡大」、(2)「移住・定住、二地域居住の促進」、(3)「農村の魅力の発信」、(4)「都市農業の推進」、が置かれている。まさに農村の活性化、担い手の確保を図っていくためには、都市住民の中から「農村関係人口の創出・拡大」し、減少する農村人口をカバーしていくことが不可避であり、関係人口の中から「移住・定住、二地域居住」する人たちを確保していくことが必要であって、そのためには「農村の魅力発信」していくことが求められるのはそのとおりだ。

a 関係人口の拡大

そしてステップアップの重要性

農村振興のカギを握るのはまさに「農村関係人口の創出・拡大」である。農業白書で関係人口に関する数値は取り上げられていないが、三大都市圏の人口約5千万人に対し、特定の地域に継続的に足を運ぶ訪問型の関係人口は860万人、地域のプロジェクトの企画・運営、協力・支援を行う直接寄与型は300万人とされる。そして直接寄与型のうち農山村に関わっている人は44万人とされ、これは三大都市圏人口の1%弱になる。三大都市圏の人口の1%、44万人というのは基幹的農業従事者136万人(2